
大学体育の授業における障害者スポーツの試み

—シッティングバレーボールを用いて—

川田 公仁

山本 哲也

1. はじめに

スポーツと人間生活との関わりを歴史的・社会的視点から捉えた丹羽¹⁹⁾は、スポーツは身体運動を通して心理的・生理的な欲求の充足を追求してきた人間行為の所産であり、先人の文化遺産であると述べ、スポーツを規定する条件として次のような要素を取り上げている。

- (1)身体活動であり、レジャーの枠内にとどまること。
- (2)自己目的的な遊戯の要素を持つこと。
- (3)より高度なものへの挑戦があり、優越し克服しようとする努力の中に満足と意味があること。
- (4)常にそのための精神的統御が成されていること。

また、スポーツを行うために求められる要素を、安田ら²⁰⁾は次のように取り上げている。

- (1)瞬間的楽しさを求めるだけでなく、意欲的、耐久的に取り組まれること。
- (2)競技として挑戦的な意識で行われること。
- (3)持続的、計画的に一連の体系の中で高い目標及び技術を獲得するために努力を要すること。
- (4)スポーツマンシップの精神に基づいて行われること。

このようにスポーツに携わることは、その競技自体を楽しむことにとどまることなく、身体的・精神的・社会的にもその付加価値を追求することができることを理解することができる。

障害者が行うスポーツ活動は、以上のようなスポーツに内在する効果を利用して行われるものである。その目的は、理学療法の一部として日常生活を豊かに積極的に独立させようとするところにある。また向上心・競争心・協調心等の自己実現を振起させようとするところにある^{8,9,10,16)}。

障害者スポーツにおいて世界的競技大会の礎を築いたグッドマン博士は、1957年の国際身体障害者福祉協会世界大会において、「失ったものを数えるのではなく、残された能力を最大限に生かそう」と述べ、その実現のためにスポーツの重要性を提唱し¹¹⁾、現在までに障害者スポーツはパラリンピックを頂点として発展を遂げてきている¹²⁾。アトランタパラリンピックに役員として参加した橋谷³⁾は、前に出ようとする気持ち（精神的）、一歩踏み出す力（身体的）、周囲との協調性（社会的）、謙虚な気持ち（人格）を持ち備えることが自立の一歩であり、スポーツがその実現の手段となることを指摘し、障害者に対するスポーツの重要性を示唆している。

このように、スポーツを通じて障害者の自立や社会への融合を高めていく必要性が叫ばれる中で、健常者の意識や取り組み、施設機関等の障害者を取り巻く環境も大きく影響してくるといえる¹⁶⁾。健常者の意識が高まらなければ障害者との社会共存は計りにくいことは明かであり、そのため一般の人々や障害者のためのボランティア活動に携わる人々等の健常者に関する研究・調査^{15,17,19)}、及びスポーツの場を提供する施設・機関等に関する研究・調査^{6,7,15)}等についても色々な視点から数多く行われてきている。

このような研究が行われることによって、健常者の意識や施設機関の現状を捉えられることができるとともに、障害者をサポートするための改善策の基礎資料を提供することができると考えられる。したがって、その研究意義の重要性を認めることができるであろう。

2. 研究目的

冬季パラリンピック大会の開催地が初めてヨーロッパを離れ、第7回大会として1998年3月に長野を舞台に開催された。長野冬季オリンピック大会の興奮の余韻も影響してか、パラリンピック大会のチケットは開幕を待たずに完売するなどの盛り上がりを見せ、大会での日本選手の目覚ましい活躍によって、我が国の障害者スポーツに対する関心度も高くなったことは事実である。

このように高い関心が示された背景の一つには、マスコミ報道等により、大会を身近に感じられたことが上げられるであろう。

そこで本研究では、障害者スポーツを体育の授業で取り扱い、体験してもらうことで身近に感じてもらい、障害者スポーツに対してどのような意識を持ち、さらに何らかの意識変化が見られるのではないかと考え、調査を進めていくことにした。

3. 研究方法

(1) 調査対象

対象としたスポーツ種目は、本学の施設器具関係から既存器具を用いて実施できるシッティングバレーボールを選定した。このシッティングバレーボールは、主に下肢に障害を持った人達によって行われている競技である。使用した施設器具は、バドミントンコート（片面：ヨコ610cm×タテ500cm 特設貼テープ）、バドミントンネット（高さ：95cmポール特設金具取付による）であった。またボールについては、ラリー継続を考慮して⁹⁾ソフトバレーボール（ミカサ MSV 特殊合成ゴムボール 重量210±5g）を用いた。

調査対象者は、つくば国際大学産業福祉学部の社会福祉学科132名、及び産業情報学科122名の大学1年生を対象とした。藤田ら²⁾は、社会福祉系大学において障害者と障害者スポーツに関心を持つ学生について調査を実施し、ルールの工夫と改正の必要性について報告しており、また上杉¹⁸⁾においても、障害者と障害者スポーツに関心を持つ学生について授業の形態や成果について報告しているが、本研究では障害者スポーツの興味や関心の如何を問わず全体的傾向を捉えるために、全学生

に対して調査を実施した。

調査は、1998年4月～5月中の体育の授業1時間を利用して行った。各学科とも4クラスが編成されており、1クラス単位で1時間の授業を行い、合計8クラス（8時間）分の調査を実施し、その結果社会福祉学科130名、産業情報学科114名からの有効回答を得ることができた。

1時間の授業形態は、まず1997年12月20日～21日に実施された第1回日本シッティングバレーボール選手権大会を収録編集したビデオを視聴した後にプレテストによる調査を実施し、その後ルール等の説明を加え¹⁹⁾、グループ分けを行った後に練習及び試合を行った。さらに、授業終了時にはポストテストによる調査を実施した。

（2）調査用紙

質問項目については、障害者スポーツに対する興味関心や関わり等を念頭に置きながら、プレテスト18項目、ポストテスト15項目を独自に作成した（プレテスト及びポストテストの15項目は同じ質問項目である）。回答は、「とても」から「全く」の5段階尺度のSD法による評価方法を用いて、「とても」を5点、「全く」を1点として得点化を行った。

（3）分析方法、及びその手順

調査結果をもとに、以下の方法と手順で分析を進めた。

- ①プレテストとポストテストの各項目について、学科毎に平均値と標準偏差を算出した。
- ②テスト別に各学科の調査結果をt検定を用いて比較し、さらに、学科間の差の様相を確認するために、質問項目に対して肯定的傾向にあるのか、否定的傾向にあるのかを調査した。
- ③学科別に各テストの調査結果をt検定を用いて比較した。
- ④対象者のシッティングバレーボールに対する意識構造を明らかにするために、因子分析を行った。

4. 結果及び考察

（1）プレイ前後における学科の傾向

プレテスト、及びポストテストの結果から、社会福祉学科（N=130）の平均値と標準偏差が表1に示され、産業情報学科（N=114）の平均値と標準偏差が表2に示されている。

この集計結果をもとに、プレテスト、及びポストテストにおいて社会福祉学科と産業情報学科の比較をt検定を用いて行ったところ、それぞれ表3、表4に示されるような結果が得られた。

プレテストの平均値においては、Q1～Q15、及びQ18で社会福祉学科が産業情報学科に対して有意（各p値表3参照）に高い値を示しており、Q16「スポーツを行うことは好き」については産業情報学科が有意（ $p=.0028$ ）に高かったものの、両学科とも4.00点を越える高い値を示していた。またQ17「スポーツを見るのは好き」については、その差に有意差は認められず、両学科とも4.00点を越える高い値を示していた。

表1 社会福祉学科における質問項目とその平均値及び標準偏差 (N=130)

No.	質問項目	Pre-test		Post-test	
		Mean	S.D.	Mean	S.D.
Q1.	障害者のスポーツに興味関心がある	4.10	0.75	4.21	0.79
Q2.	シッティングバレーに興味関心がある	3.65	0.97	4.00	1.00
Q3.	体育の授業種目として取り扱える	3.69	0.98	3.67	1.19
Q4.	むずかしい競技である	4.26	0.83	4.50	0.86
Q5.	自分に適したスポーツ種目である	2.81	0.79	2.87	1.01
Q6.	楽しくできるスポーツ種目である	3.57	0.88	4.06	0.99
Q7.	健常者と障害者は一緒にプレイできる	4.28	0.89	4.02	1.00
Q8.	健常者のスポーツとしても成立する	3.77	1.06	3.76	1.07
Q9.	プレイしたいと思うスポーツ種目である	3.72	0.95	3.53	1.28
Q10.	意欲的に取り組める	3.82	0.92	4.05	0.96
Q11.	充実感を味わえる	3.64	1.00	3.74	1.18
Q12.	身体を動かす満足感を味わえる	3.45	1.05	3.52	1.20
Q13.	全力でやれる	3.61	1.08	3.70	1.19
Q14.	親睦を深められるスポーツ種目である	4.27	0.80	4.13	1.00
Q15.	課外活動としても取り組んでみたい	3.18	0.99	3.11	1.23
Q16.	スポーツを行うことは好き	4.02	1.12	-	-
Q17.	スポーツを見ることは好き	4.15	0.92	-	-
Q18.	バレーボールに対する興味関心	3.62	1.01	-	-

表2 産業情報学科における質問項目とその平均値及び標準偏差 (N=114)

No.	質問項目	Pre-test		Post-test	
		Mean	S.D.	Mean	S.D.
Q1.	障害者のスポーツに興味関心がある	2.81	1.06	3.44	1.03
Q2.	シッティングバレーに興味関心がある	2.61	1.08	3.15	1.20
Q3.	体育の授業種目として取り扱える	2.84	1.09	2.79	1.24
Q4.	むずかしい競技である	3.82	1.04	3.81	1.17
Q5.	自分に適したスポーツ種目である	2.23	0.86	2.39	1.06
Q6.	楽しくできるスポーツ種目である	2.83	1.02	3.25	1.20
Q7.	健常者と障害者は一緒にプレイできる	3.69	1.11	3.53	1.18
Q8.	健常者のスポーツとしても成立する	3.40	1.25	3.31	1.27
Q9.	プレイしたいと思うスポーツ種目である	2.83	1.06	2.66	1.20
Q10.	意欲的に取り組める	3.04	1.04	3.33	1.21
Q11.	充実感を味わえる	2.80	1.07	2.92	1.21
Q12.	身体を動かす満足感を味わえる	2.73	1.19	2.93	1.25
Q13.	全力でやれる	2.86	1.12	3.11	1.31
Q14.	親睦を深められるスポーツ種目である	3.45	1.15	3.18	1.18
Q15.	課外活動としても取り組んでみたい	2.30	1.00	2.48	1.20
Q16.	スポーツを行うことは好き	4.41	0.90	-	-
Q17.	スポーツを見ることは好き	4.18	0.94	-	-
Q18.	バレーボールに対する興味関心	3.27	1.07	-	-

表3 社会福祉学科と産業情報学科におけるプレテストの比較 (df=242)

No.	平均差	t 値	p 値
Q1.	1.29	11.100	<.0001
Q2.	1.05	7.998	<.0001
Q3.	0.85	6.407	<.0001
Q4.	0.45	3.727	.0002
Q5.	0.58	5.483	<.0001
Q6.	0.74	6.047	<.0001
Q7.	0.58	4.567	<.0001
Q8.	0.37	2.477	.0139
Q9.	0.89	6.908	<.0001
Q10.	0.78	6.206	<.0001
Q11.	0.84	6.337	<.0001
Q12.	0.72	5.004	<.0001
Q13.	0.75	5.301	<.0001
Q14.	0.82	6.545	<.0001
Q15.	0.89	6.945	<.0001
Q16.	-0.40	3.022	.0028
Q17.	-0.03	0.246	.8061
Q18.	0.35	2.645	.0087

表4 社会福祉学科と産業情報学科におけるポストテストの比較 (df=242)

No.	平均差	t 値	p 値
Q1.	0.77	6.569	<.0001
Q2.	0.85	6.053	<.0001
Q3.	0.88	5.655	<.0001
Q4.	0.69	5.311	<.0001
Q5.	0.48	3.635	.0003
Q6.	0.81	5.755	<.0001
Q7.	0.49	3.504	.0005
Q8.	0.46	3.034	.0027
Q9.	0.87	5.472	<.0001
Q10.	0.71	5.199	<.0001
Q11.	0.82	5.332	<.0001
Q12.	0.59	3.721	.0002
Q13.	0.59	3.669	.0003
Q14.	0.96	6.834	<.0001
Q15.	0.63	4.012	<.0001

表5 社会福祉学科におけるポスト-プレテストの比較 (df=129)

No.	平均差	t 値	p 値
Q1.	0.11	1.260	.2099
Q2.	0.35	3.404	.0009
Q3.	-0.02	0.193	.8476
Q4.	0.24	2.231	.0274
Q5.	0.06	0.519	.6044
Q6.	0.49	4.480	<.0001
Q7.	-0.26	2.228	.0276
Q8.	-0.01	0.066	.9474
Q9.	-0.19	1.383	.1690
Q10.	0.22	2.050	.0424
Q11.	0.10	0.794	.4284
Q12.	0.07	0.523	.6022
Q13.	0.09	0.680	.4976
Q14.	-0.14	1.289	.1997
Q15.	-0.08	0.566	.5721

表6 産業情報学科におけるポスト-プレテストの比較 (df=119)

No.	平均差	t 値	p 値
Q1.	0.63	4.622	<.0001
Q2.	0.54	3.598	.0005
Q3.	-0.05	0.347	.7289
Q4.	-0.01	0.059	.9534
Q5.	0.16	1.216	.2265
Q6.	0.42	2.779	.0064
Q7.	-0.17	1.078	.2833
Q8.	-0.10	0.589	.5572
Q9.	-0.18	1.130	.2609
Q10.	0.29	1.850	.0669
Q11.	0.12	0.789	.4319
Q12.	0.20	1.335	.1847
Q13.	0.25	1.708	.0903
Q14.	-0.27	1.823	.0709
Q15.	0.18	1.247	.2150

ポストテストの平均値においては、全項目において社会福祉学科が産業情報学科に対して有意(各p値表3参照)に高い値を示していた。

このような学科間の違いにおいて、質問項目に対する様相がどのようなものであるかを確認するために、平均値3.00点を境界として、その値よりも高ければ質問項目に対して肯定的傾向、低ければ否定的傾向として分類した。但し、プレテストのみの質問項目であるQ16～Q18は対象外とした。

プレテストにおいて、社会福祉学科は肯定的傾向にあるが産業情報学科が否定的傾向にある項目は、Q1「障害者のスポーツに興味関心がある」、Q2「シッティングバレーに興味関心がある」、Q3「体育の授業種目として取り扱える」、Q6「楽しくできるスポーツ種目である」、Q9「プレイしたいと思うスポーツ種目である」、Q11「充実感を味わえる」Q12「身体を動かす満足感を味わえる」、Q13「全力でやれる」、Q15「課外活動としても取り組んでみたい」といった9項目であった。

また、両学科とも肯定的傾向にある項目は、Q4「むずかしい競技である」、Q7「健常者と障害者は一緒にプレイできる」、Q8「健常者のスポーツとしても成立する」、Q10「意欲的に取り組める」、Q14「親睦を深められるスポーツ種目である」といった5項目であった。

両学科とも否定的傾向にあった項目は、Q5「自分に適したスポーツ種目である」の1項目であった。

ポストテストにおいては、プレテストに比較して変化が見られた項目は、産業情報学科のQ1「障害者のスポーツに興味関心がある」、Q2「シッティングバレーに興味関心がある」、Q6「楽しくできるスポーツ種目である」、Q13「全力でやれる」の4項目のみであり社会福祉学科と共に肯定的傾向を見せた。また、プレテストの否定的傾向から変化が見られなかった項目は、両学科共にQ5「自分に適したスポーツ種目である」の1項目であり、競技のむずかしさが影響しているものと考えられる。さらにQ3「体育の授業種目として取り扱える」、Q9「プレイしたいと思うスポーツ種目である」、Q11「充実感を味わえる」、Q12「身体を動かす満足感を味わえる」、Q15「課外活動としても取り組んでみたい」の5項目については、社会福祉学科においては肯定的傾向にあったが、競技自体から得られる満足度が得られにくいことが考えられるため、Q16「スポーツを行うことは好き」に対して高い値を示した産業情報学科において、否定的傾向が変化しなかったものと推測される。

このように社会福祉学科が産業情報学科に対して意識が高いことは、調査結果からプレテストにおいてもポストテストにおいても明かであるものの、プレテストにおいては、質問項目15問中に肯定的傾向が社会福祉学科では14項目、産業情報学科では5項目と産業情報学科に否定的傾向が強かったが、ポストテストにおいては、肯定的傾向が社会福祉学科では14項目、産業情報学科では10項目と産業情報学科の否定的傾向が減少していた。

このように、実際に経験してみることによって、両学科間の意識の差は埋められないものの、意識が高まる傾向を見せることを確認することができた。

(2) プレイ前後の意識変化

社会福祉学科において、ポストテストとプレテストの比較をt検定を用いて行ったところ、表5に示されるような結果が得られた。有意差が認められた項目は、次に上げる5項目であった。

ポストテストがプレテストに対して有意に高くなっていた項目は、Q 2「シッティングバレーに興味関心がある（ $p = .0009$ ）」、Q 4「むずかしい競技である（ $p = .0274$ ）」、Q 6「楽しくできるスポーツ種目である（ $p < .0001$ ）」、Q 10「意欲的に取り組める（ $p = .0424$ ）」の4項目であったが、このことは、実際にシッティングバレーボールを経験したことにより、競技としてのむずかしさを感じたけれども、楽しく意欲的に取り組めたことで、興味や関心が深まったものと考えられる。

プレテストがポストテストに対して有意に高くなっていた項目は、Q 7「健常者と障害者は一緒にプレイできる（ $p = .0276$ ）」の1項目であったが、このことは、Q 4「むずかしい競技である」の項目でプレテストの平均値が4.26点からポストテストの4.50点へと非常に高い値での変化を見ていることから、本研究の対象者らが他に対してマイナス要因になってしまうことを危惧している結果であると推測される。しかし、Q 7の値は、低下したポストテストにおいても4.02点と高い値を示していた。

産業情報学科において、ポストテストとプレテストの比較をt検定を用いて行ったところ、表6に示されるような結果が得られた。有意差が認められた項目、あるいはその差が有意な傾向にあった項目は、次に上げる6項目であった。

ポストテストがプレテストに対して有意に高くなっていた項目、あるいは有意に高い傾向にあった項目は、Q 1「障害者のスポーツに興味関心がある（ $p < .0001$ ）」、Q 2「シッティングバレーに興味関心がある（ $p = .0005$ ）」、Q 6「楽しくできるスポーツ種目（ $p = .0064$ ）」、Q 10「意欲的に取り組める（ $p = .0669$ ）」、Q 13「全力でやれる（ $p = .0903$ ）」の5項目であり、また、プレテストがポストテストに対して有意に高い傾向にあった項目は、Q 14「親睦を深められるスポーツ種目である（ $p = .0709$ ）」の1項目であった。スポーツを行うことや見ることの意識が非常に高かったこの学科の対象者らについても、プレテストとポストテスト共に「競技のむずかしさ」の値が高くなっているが、実際にシッティングバレーボールを経験してみると、そのむずかしさゆえに意欲的に全力で取り組まなければならない部分が引き出されることとなり、楽しさの度合いも高くなったものと考えられる。その結果として、シッティングバレーボールに対する興味関心も深まったものと考えられる。さらに、この競技が歩行や起立が困難な人達において盛んに取り組まれているという背景を認識した上で、身体の動きが制限される中で競技を行い体験したこのにより、障害者スポーツについても興味や関心が深まったものと推測される。しかし、上述したように充実感や身体を動かす満足感、プレイしたい競技等の意識が否定的傾向にあることから、「親睦を深められるスポーツ種目」の評価が低下したものと推測さる。

(3) シッティングバレーボールに対する意識構造

シッティングバレーボールを体育の授業で実際に経験することによって、このスポーツ種目に対する意識構造がどのようになっているかを明らかにするために、ポストテストの結果を用いて因子分析を行った。この分析では主因子法により因子を抽出し、その後バリマックス回転を施したが、因子の抽出には固有値が大きい順に、その累積寄与率が75%を越えるものを基準とした。

社会福祉学科の分析については、Q 4の共通性の値が0.085と低かったために、この項目を除外し

て再度因子分析を行った。その結果が表7に示されている。

第1因子に負荷量が高いQ6「楽しくできるスポーツ種目」、Q10「意欲的に取り組める」、Q11「充実感を味わえる」、Q12「身体を動かす満足感を味わえる」、Q13「全力でやれる」、Q14「親睦を深められるスポーツ種目である」については、シッティングバレーボールの実践を通じて得られる評価に関する項目であることから、「体験的評価」と解釈することができる。

第2因子に負荷量が高いQ3「体育の授業種目として取り扱える」、Q5「自分に適したスポーツ種目である」、Q9「プレイしたいと思うスポーツ種目である」、Q15「課外活動としても取り組んでみたい」については、シッティングバレーボールという競技自体の自己評価に関する項目であることから「主観的評価」と解釈することができる。

第3因子に負荷量が高いQ7「健常者と障害者は一緒にプレイできる」、Q8「健常者のスポーツとしても成立する」については、シッティングバレーボールを客観的に捉えた場合の評価に関する項目であることから、「客観的評価」と解釈することができる。

第4因子については、Q1「障害者のスポーツに興味関心がある」、Q2「シッティングバレーに興味関心がある」という項目に負荷量が高いため「興味関心」と解釈することができる。

以上のように、社会福祉学科においては、シッティングバレーボールを4つの観点から捉え、評価しているという意識構造を明らかにすることができた。

産業情報学科の因子分析については、社会福祉学科と同じくQ4の共通性の値が0.233と低かったために、この項目を除外して再度因子分析を行った。この時3つの因子が抽出されたが、その後バリマックス回転を施したところ解の改善は見られなかった。その結果は表8に示されている。

この時、固有値の大きさに注目すると第2因子以下で非常に低くなり、また各項目の負荷量では第1因子において全ての項目で高い値を示していることから、1因子構造であることが理解できる。このように、産業情報学科においては、社会福祉学科が4つの因子で評価しているのに対して、これらを一義的に捉えることにより評価しているという意識構造を明らかにすることができた。

5. まとめ

本研究では、障害者を中心として行われているシッティングバレーボールを、健常者である本学の学生に体育の授業を用いて実際に体験してもらうことで、障害者スポーツに対する意識、捉え方がどのように変化するのか、また、社会福祉学科の学生とそうでない学科の学生にどのような意識の差が見られるのかを明らかにしようと研究を進めた結果、以下に示すような事柄について明らかにすることができた。

- (1)障害者スポーツに対して、社会福祉学科は肯定的傾向にあり、産業情報学科は否定的傾向が強かったことが確認されたが、実際に経験したことで、産業情報学科においても肯定的傾向へと変化が見られた。
- (2)社会福祉学科においては、むずかしい競技ではあるが、楽しく意欲的に取り組めるスポーツ種目であるという意識の高まりが見られ、その結果シッティングバレーボールに対する興味や関心の

表7 社会福祉学科の因子負荷量

No.	質問項目	F 1	F 2	F 3	F 4	共通性
Q11.	充実感を味わえる	.885	.272	.076	.106	.815
Q13.	全力でやれる	.834	.032	.091	.111	.598
Q12.	身体を動かす満足感を味わえる	.798	.242	.071	.181	.652
Q6.	楽しくできるスポーツ種目である	.757	.396	-.032	.122	.705
Q14.	親睦を深められるスポーツ種目である	.744	.319	.206	.206	.720
Q10.	意欲的に取り組める	.694	.027	.220	.468	.601
Q9.	プレイしたいと思うスポーツ種目である	.333	.781	.048	.334	.720
Q3.	体育の授業種目として取り扱える	.427	.696	.011	.299	.668
Q5.	自分に適したスポーツ種目である	.475	.683	.144	-.036	.577
Q15.	課外活動としても取り組んでみたい	.502	.664	.102	.104	.652
Q7.	健常者と障害者は一緒にプレイできる	.305	.268	.839	.128	.509
Q8.	健常者のスポーツとしても成立する	.148	.596	.616	.149	.527
Q1.	障害者のスポーツに興味関心がある	.372	.230	.201	.792	.637
Q2.	シッティングバレーに興味関心がある	.351	.496	.030	.705	.715
固有値		7.992	1.275	0.858	0.841	
累積寄与率		57.1	66.2	72.3	78.3	

表8 産業情報学科の因子負荷量

No.	質問項目	F 1	F 2	F 3	共通性
Q1.	障害者のスポーツに興味関心がある	.834	-.124	-.123	.791
Q2.	シッティングバレーに興味関心がある	.834	-.288	-.195	.819
Q3.	体育の授業種目として取り扱える	.844	-.274	.004	.756
Q5.	自分に適したスポーツ種目である	.736	-.437	.075	.609
Q6.	楽しくできるスポーツ種目である	.820	.135	-.173	.693
Q7.	健常者と障害者は一緒にプレイできる	.680	.320	.548	.577
Q8.	健常者のスポーツとしても成立する	.756	-.225	.472	.667
Q9.	プレイしたいと思うスポーツ種目である	.868	-.180	.058	.790
Q10.	意欲的に取り組める	.783	.420	-.090	.683
Q11.	充実感を味わえる	.868	.035	-.176	.792
Q12.	身体を動かす満足感を味わえる	.863	.063	-.128	.768
Q13.	全力でやれる	.746	.389	-.011	.652
Q14.	親睦を深められるスポーツ種目である	.841	.236	-.072	.740
Q15.	課外活動としても取り組んでみたい	.786	-.008	-.036	.647
固有値		9.097	0.957	0.678	
累積寄与率		65.0	71.8	76.6	

高まりが見られた。しかし、健常者と障害者が一緒にプレイすることに対しては、競技のむずかしさが影響しているものと考えられることから、高い意識でありながらもその低下が見られた。

産業情報学科においては、むずかしい競技であるがゆえに、意欲的に全力で取り組み楽しくできるスポーツ種目であるという意識の高まりが見られ、その結果シッティングバレーボールや障害者スポーツに対する興味や関心の高まりが見られた。しかし、親睦を深めるスポーツ種目としては、充実感や身体を動かす満足感等の意識が否定的傾向にあることが影響していると考えられることから、意識の低下が見られた。

(3)社会福祉学科は、シッティングバレーボールを体育の授業を通して、「体験的評価」、「主観的評価」、「客観的評価」、「興味関心」という4つの観点で捉え、評価していた。これに対して産業情報学科は、これらの観点を区別せずに一義的に捉えていた。

以上のようなことから、障害者スポーツとしてのシッティングバレーボールに対して社会福祉を志す学生とそうでない学生については、意識や捉え方に差異が認められたものの、実際に体験して、身近に感じられるようになることが、障害者スポーツに対する意識を高めるためには重要であると思われ、体育の授業において提供していくことも効果的であることを認識することができた。

今回の研究では1時間の授業の中で意識調査を行った結果をもとに研究を進めたが、今後は単元として取り扱い、意識やスキルの深まりが見られた条件の中で調査を進めていく必要があり、また他種目における傾向についても調査する必要があると思われる。

(かわだ・きみひと つくば国際大学)

(やまもと・てつや つくば国際大学)

参考文献

1. 藤田紀昭、高橋豪仁、黒須 充 1996 身体に障害のある人のスポーツへの社会科に関する研究—第31回全国身体障害者スポーツ大会出場者を対象として— 日本福祉大学研究紀要第96号第1分冊 pp.203-232
2. 藤田紀昭、岡川 暁、小林培男、山本英毅、山本秀人 1997 大学体育としての障害者スポーツの可能性について 日本体育学会第48回大会号 p.611
3. 橋谷俊胤 1997 Atlanta Paralympic から見る障害者スポーツのすばらしさ 日本体育学会第48回大会号 p.612
4. Hollis. F. Fait 1978 Special Physical Education:Adapted, Corrective, Developmental W. B. Saunders Company
5. 笠木秀樹 1997 大会参加者の満足度からみた障害者スポーツの振興 日本体育学会第48回大会号 p.153
6. 小島良信 1987 障害を克服する1手段としてのスポーツ～子供から老人まで～ 理学療法

- と作業療法 pp. 593-601
7. 丸山純子 1996 ルポ・市民が手づくりするスポーツ行事をたずねて ノーマライゼーション第16巻7号 pp. 21-27
 8. 中川一彦 1976 身体障害者とスポーツ 日本体育社
 9. 中川一彦 1987 身体障害者スポーツの現状 理学療法と作業療法第21巻9号 pp. 574-578
 10. 中川一彦 1996 自己実現をめざす障害者とスポーツ 月刊福祉 pp. 14-19
 11. 中川一彦 1997 パラリンピック競技大会の夜明け 筑波大学体育科学系紀要第20巻 pp. 1-7
 12. 中島武範 1996 身体障害者とスポーツ 月刊福祉 pp. 20-23
 13. 日本シッティングバレーボール選手権大会1997年度競技規則 pp. 1-7日本シッティングバレーボール協会
 14. 丹羽劭昭 1982 スポーツと生活 朝倉書店
 15. 能村藤一 1996 知的障害者とスポーツ～いっそうの環境整備が必要～月刊福祉 pp. 24-27
 16. 総理府編 1997 障害者白書 大蔵省印刷局
 17. 丹所 忍、徳田克己 1996 障害者スポーツに関する大学生の意識障害理解研究第1号 pp.61-66
 18. 上杉麗子 1996 特殊体育～大学における障害者体育～和光大学におけるスポーツ研究2 Aの紹介 女子体育 pp. 47-51
 19. 山中祐司 1995 第2回エンジェルテニスカップ開催～スポーツを通じて障害者と健常者の交流を深める～ 月刊福祉 pp. 86-89
 20. 安田 保、湊谷 弘、東木美憲、高畑俊成 1986 体育・スポーツ概論 学術図書出版社

Sports for the Handicapped Experiment in college Physical Education Class - using sitting volleyball -

Kimihito Kawada
Tetsuya Yamamoto

In this study, we had sitting volleyball, mainly practiced among handicapped people, actually played by the students at this college, who are non-handicapped, in their physical education classes.

The purpose of the study is to see how the students' attitudes toward sports for the handicapped will change, and to find out the difference in attitudes between the students in the social welfare department and those in other departments. The results are as follows:

- (1) A tendency has been confirmed that the students in the social welfare department show a positive attitude toward sports for the handicapped, while the students in the industry and information department have a negative one. After actually practicing the sport in class, however, the students in the industry and information department turned for the better in their attitudes.
- (2) The students in the social welfare department, although admitting that sitting volleyball is a difficult event, have found it an amusing sport which they can enjoy playing. As a result, their interest in sitting volleyball has been enhanced. Yet, when it comes to handicapped and non-handicapped people playing it together, there was a decline in their willingness to play, which was strong before.

The students in the industry and information department, it has been observed, have developed a positive attitude that sitting volleyball is an exciting sport which they can willingly play with all their might and heart. However, as to whether it contributes to building a closer relationship among the players, they showed a decline in their attitude.

- (3) The students in the social welfare department evaluated sitting volleyball from four viewpoints: empirical evaluation, subjective evaluation, objective evaluation, interests and concerns. The students in the industry and information department, on the other hand, made no such distinction as to viewpoints in evaluation.

From the findings mentioned above, we can say that it is important to be more familiar with sports for the handicapped by actually playing them, if we are to raise the people's consciousness of sports for the handicapped; though there does exist a difference in attitudes toward sitting volleyball, as one of the sports for the handicapped, between the students who wish to seek occupation in social welfare and those who do not. We were also able to find that college physical education class can be effectively put to good use to that end.

Key Words: Sports for the handicapped, Sitting volleyball, College physical education class